

都市テクスト論としての〈沖繩〉(二)

——目取真俊「水滴」を視座として——

田 口 律 男

一

目取真俊(めどるま・しゅん)の「水滴」(『文学界』、一九九七・四)が、第二七回九州芸術祭文学賞に選ばれ、その後、第一一七回(平成九年度上半期)芥川賞を受賞したことは、記憶に新しい。徳正(とくしょう)という老人の右脚が、ある日突然、〈冬瓜〉^{すげい}ほどに膨れ出し、その親指からしたたりおちる〈水滴〉を、沖繩戦で非業の死を遂げたかつての戦友たちが啜り合い、渴きを癒されるというシュールレアリスム仕立ての小説である。又吉栄喜の「豚の報い」に続き、沖繩発信の小説が二年連続の芥川賞を受賞したことから分かるように、いま改めて、〈沖繩〉に熱い視線が集まっている。しかし、こうした文学現象を手放して喜んでいいかについては疑問が残る。なぜなら、そうした〈沖繩〉への熱い眼差しには、ある種の偏向——そ

れを、異文化に対するオリエンタリズム(E・W・サイード)と呼ぶか、あるいは南島イデオロギー(村井紀)と呼ぶかは別にして——が潜んでおり、そのことが〈沖繩〉を巡るリアルな諸問題を隠蔽するだけでなく、今日の日本文学(日本文化)の閉塞状況とどこかで共犯関係を結んでいる可能性があるからである。しかし、このことは、いち早く、当の目取真自身も危惧していたことであつた。目取真は、「良心的」な理解者である池澤夏樹との対談の中で、次のような奇立ちを表明していた。

〈ただ、今まで『水滴』についての感想や批評を聞いてると、沖繩の風土とか文学的な豊穡さとか、そういう環境面から作品を語られやすい。僕は、書き手として沖繩代表というつもりもないし、実際に沖繩で書いている他の人たちの意識も、沖繩文学の鉉脈という図式からは離れていく感じがするんです。〉、いま、癒しということをおっしゃいましたが、最近よく聞く、沖繩は癒しの場だということのも

問題があると思うんです。本土の厳しい環境の中で傷ついた人たちが沖繩に来て、ちよつとした沖繩的なぬくもりに触れて帰っていく。それによって精神的な安らぎを得る人も確かにいるんですけど、ただ、だからといって沖繩を癒しの場として捉えるような発想は、沖繩の人たちはまず拒否した方がいい。沖繩の人自身が、ここを癒しの場として認識してしまうと、沖繩内部の厳しい状況や、別の顔が見えなくなってしまうからです。(中略) 沖繩だから癒しに近いということはないでしょう。——。ここには、目取真の深い懐疑が露呈している。つまり、沖繩を美化し、特権化(差別化の裏返し)しようとする本土側の眼差しに内在する隠れた文学・美学イデオロギーについて、目取真は、はっきりと拒否の姿勢を示しているのである。

こうした目取真の頑なな姿勢の背後には、一つの出来事があった。「水滴」が発表された『文学界』に、まさに時を同じくして掲載された「特集 沖繩——文学の鉅脈」(『文学界』、一九九七・四)なるシンポジウムが、それである。へ新しい普遍へと副題されたこのシンポジウムが、どのような質のものであったかは、その謳い文句——へ日本であつて日本でない土地——沖繩。その場所の、不思議なエネルギーに満ち満ちた言葉が、土着にとどまらず、世界文学へ発信する可能性はどこにあるのか。(傍点・田口)を見れば一目瞭然であろう。このシンポジウムには、日野

啓三・池澤夏樹・大城立裕・又吉栄喜・小浜清志の五人の作家が顔を並べ(進行まとめ役は、名前が記されていないが、『文学界』元編集長・湯川豊と推測される)、それぞれの沖繩観や自己の文学観を披瀝している。その一端を例示すれば、次の如くである。

僕にとつて沖繩性とは何かというと、まず、非常にパランスのとれた社会です。那覇の寄宮よりみやに僕の仕事場があるんですが、昼間にワープロを打っていると、窓からずつと子供の声が聞こえてくる。毎日同じ時間に「テツツロー!」とか呼びにきて、夕暮れまで外で遊んでいるんですね。あえて言うほどのことじゃないと思われるでしょうが、例えば東京の住宅街では、もう子供なんて一人もいないのではという気すらする。姿が見えないし、年寄りもいない。僕は、ノスタルジーからだけでなく、沖繩の方が社会本来の姿だと思つし、居心地がいいですね。沖繩のように社会がいまだに普通の姿をしていることの値打ちは、おそらく全日本語圏で通用すると思うんです。これは、移住してきた者だからこそ違いに気付けたのかもしれない。(池澤夏樹) 僕の沖繩体験は貧しいものなんです、その中で言えることは、ここには全体があるということです。トータルなものがある。自然、靈魂、那覇のような都市、いろんなものが全的にある。そう感じることは後

る向きのノスタルジーを誘います。でもそれだけだったら、さほど沖繩に魅力や啓示を感じることはないんです。では、なぜ沖繩が気になるかというと、実はこの全的なものは、未来において我々が回復したいと思っているものなのです。沖繩の魅力は、単に過去のノスタルジーだけではなくて、未来へ向けて我々が努力していくべき、目標の幻想なんです。(日野啓三)

彼等は、さすがに〈沖繩〉を単純な過去のノスタルジーの文脈で語ることに愚かさに気づいているようだが、共に現代日本社会が既に喪ってしまった〈バランス〉や〈全体性〉を称揚して恥じない。そして、〈過去のノスタルジー〉を〈未来〉への指向に置き換え、〈回復〉すべき〈目標〉として美質をあげつらう。ここには、〈沖繩〉のリアルな歴史や現実を視る眼は、完全にスポイルされている。

考えてもみるがいい。かつての琉球王国の時代から現在に至るまで、様々な政治力学によってマイノリティ(少数者)の境域に追いやられ、文字通り言葉・身体・トポスを引き裂かれてきた〈沖繩〉が、現代のポストコロニアリズム状況において、「主体」を立ち上げることの困難さ(アイデンティティ・ポリティクスの問題)に直面している現実を前にして、〈居心地がいい〉だの〈魅力や啓示〉だのと語るものが、いかに抑圧的であり、政治的であることか。いや、彼等は、「政治的」ですらないのだ。つまり、自ら

の政治性・イデオロギー性に徹底的に無自覚なまま、「善意」として、あるいは文学(文化)の擁護者として、〈沖繩〉を熱く語っているのである。こうした文学・美学イデオロギーこそが、実は、最もたちの悪い抑圧の言説装置であることに、彼等は全く気づいていない。

目取真俊は、こうした文学・美学イデオロギーにこそ、頑なな峻拒の姿勢を差し向けていたに違いない。〈本土が沖繩を心やさしき場と思ひ込むことは構わないが、沖繩ははっきり拒絶した方がいい。心をいくら語られても、現実の問題は見えてこないし、解決にもならない。沖繩を本土のいやしの場にしてほしくない。〉、〈心とすると、いま沖繩の文化や伝統芸能がひとつの救いのように語られている部分がある。これは沖繩の政治的な無力さの裏返しとして持ち上げられているのじゃないか。政治的には無力であって、文化的には本土の大和文化にある程度の刺激を与える構図というのは、政府にとっていちばんありがたい存在です。政治的に無力な分、文化や芸能で頑張ってくれみたいなものを感じます。〉。こういった目取真の発言は、今日の〈沖繩〉を巡る言説空間において、ひとときわ異彩を放っている。念のために、先に紹介した池澤夏樹との対談の中で、池澤が自己反省を込めながら紹介した目取真のエッセイ(『けし風』、一九九六・一二)の一部も引用しておこう。

それに輪をかけて最近本土の知識人も親切でやさ

しい人が増えて、沖繩を賛美するばかりで辛辣な批判はしないものだから、ほんとはあまり自信のないウチナンチュも妙な自信を持つてしまう。(中略) / テーゲーやチルダイがもてはやされ、「沖繩からは日本が見える」だの「沖繩のやさしさの文化」だの聞こえのいい言葉が並べられる。やさしい言葉による良心的解釈。 / まったくうんざりするばかりだ。 / この沖繩は政治も文化も貧しいシマだ。政府から金をもらうためには少女が軍隊に暴行されても最後は泣き寝入りして新しい生贄を捧げるシマだ。老女たちの祈りは届かず、海も山も金儲けの対象となつて荒れ、腑抜けた男たちが泡盛とスロットマシンでだらしなく過ごし、甘つたれた若者が58号線の椰子の木に激突して果てる。軍用地料という不労所得の旨味を味わい、自立しようという気概もないこの沖繩の貧しさ。少なくとも、この貧しさを直視するところから小説を書いていきたい。

もはや纏説するまでもないが、目取真の認識の強度を端的に示す文章であると言つてよいだろう。しかし、問題もある。池澤夏樹は、この目取真の文章を引きながら、へ今の僕にとって、なかなかこたえた。と正直に告白しつつも、へただ、あのエッセイの苛立ちと警戒の姿勢と、『水滴』の自在筆運びとは、まるで別の部屋での仕事のように見えたんです。その二つの関係は、目取真さんの中ではどう

なっているんですか。と素朴な質問を浴びせていたが、その問いに關しての目取真の応答は、へ僕は十年ぐら前から、沖繩での文学上の付き合いや人間關係はほとんど断つてきました。(中略) ある厳しさがないと、基地を描くにしても沖繩戦を描くにしても、どうしても切り口が甘くなると思うんです。というように、どこかピントのずれたものになつている。池澤の問いの核心は、目取真の認識のベクトルとテキストとしての「水滴」との奇妙な差異(ズレ)を問題にしていたはずである。もつと言えば、池澤にとっては、「水滴」の読後感が、あまりに滑らかで口当たりの良いものであつたために、目取真の頑ななまでの峻拒の姿勢が不可解なものに映つただろうことが予測されるのである。事実、池澤は、「水滴」発表当時から芥川賞受賞まで、一貫してこのテキストの良き「理解者」だったのである。

つまり、問題になつてくるのは、書き手である目取真自身の認識の強度・へ厳しきではなく、「水滴」というテクスト自体の持つ強度、あるいはその内質ということになるだろう。「水滴」は、発表以来、好評をもつて迎えられたし、芥川賞の選評を見ても、圧倒的な支持を得たことが分かる。しかし、その中には、例の日野啓三のように、へ沖繩という不思議な場の力、へ沖繩と自然と文化と、そして本物の詩的小説の力、といった尺度で支持したのも

散見されるのである。ということとは、「水滴」というテクストには、池澤・日野に代表される文学・美学イデオロギー的〈沖繩〉観を呼び寄せる何かが内包されていたのではなかったか。あるいは、もしそうでないとしたら、「水滴」の真価はまだ正当に見極められていないということにもなる。このテクストが安易に消費される前に、私達は、その強度と限界とを〈厳し〉く測定しておかなければならないのである。

一一

まず、多くの評者がテーマとして掲げる「癒し」の問題について検討してみよう。このテクストには、徳正の右脚親指からしたたる〈水滴〉——科学的には、へ少し石灰分が多い〈だけ〉の〈ただの水〉とされる——の不思議な〈効能〉を巡って、審級の異なる複数の「癒し」が描き出されている。それは、(1) 戦死した兵士にとつての「癒し」、(2) トラウマを抱え戦後を生き延びた徳正にとつての「癒し」、(3) 戦争の傷とは無縁な人々にとつての「癒し」、となるが、細かく見れば、(4) 自然の草木にもそれは及んでいるし、(5) 例外として全く作用を及ぼさなかった徳正の妻・ウシの存在も視野に入れておく必要がある。

(1) についてのテクストの言説は、さほど読者に振れ

を喚起させないものとなっている。彼等は、夜な夜な徳正の右脚親指からしたりおちる〈水滴〉を啜ることで根源的な〈渴き〉を癒され、満たされるとやがて静かに消えていく。

兵隊達は皆おとなしかった。危害を加えられるのではないか、という恐怖はじきに消えた。一人残らず深い傷を負っていて、立っているのがやつとというようになつた。中には正視できないような兵隊もいた。まだ二十歳ぐらいの兵隊は、喉から鎖骨のあたりにかけて大きく抉り取られていて、呼吸のたびにごぼごぼと血の泡が気管から噴き出していた。そういう兵もやはり一心に水を飲んでいて。壁の時計を見ると一人二分程度。滴る程度の水では、それだけの時間で渴きを癒すのは難しいらしく、たいがい兵隊は立ち去る時に未練氣に足に目をやり、次の兵隊に急がされて順を譲るものも少なくなかった。時折は足の裏をなめ上げたり、水の出が悪くなったのか親指を口に含んで吸う者までいて、徳正はくすぐったさに目を剝いた。

表現の緻密さ・精確さが、逆に幻想的效果をもたらすことを、この引例は教えてくれる。シュールレアリスムとは、シュールなレアリスム(超・現実主義)ではなく、シュー

ルレエルのイスマ(超現実・主義)の謂である。「超現実」とは、過剰な現実、つまり日常性の皮膜を裂開した生成流動するリアルな現実を指し、事物の精細な描写がもたらす明瞭な現前性のみが、逆説的に幻想性を保証する。なぜなら、幻想とは、非現実的な空想ではなく、現実を構成している自明性が剥落するところに生起するものだからである。

そもそも、彼等(亡霊者)は、沖繩戦の末期に致命傷を受け、絶望的な後退戦のなかで、見殺しにされた者達だった。しかし、留意しておかなければならないのは、これらの亡霊者が全て徳正と行動を共にした(あるいは、関わりをもった)日本兵(男)達に限られることである。それを代表し代行する人物が、へ村から二人だけ首里の師範学校に進み、鉄血勤皇隊員として行動を共にした石嶺である。徳正は、致命傷を負った石嶺を見殺しにしただけでなく、最期の水さえ奪い取って貪り飲んでしまったという過去を隠蔽している。

「石嶺」／耳元で呼んだが返事はなかった。頬を近づけるとかすかな呼吸があった。徳正は体をずらし石嶺の体を横にした。腹を縛った巻脚絆がよじれて小さな音を立てた。セツの渡してくれた紙包みから乾パンを取り出して手に握らせる。水筒の水を掌に受けて、白い歯のぞく唇の間にこぼした。あふれた水が頬を伝わるのを目にした瞬間、徳正は我慢できなくなつて、

水筒に口をつけ、むさぼるように水を飲んだ。息をついた時、水筒は空になつていた。水の粒子がガラスの粉末のように痛みを与えながら全身に広がっていく。(中略)空の水筒を腰のあたりに置いた。／「赦してとらせよ、石嶺……」／徳正は斜面を滑り降り、木々の枝に顔を叩かれながら、森を駆け抜けた。

これが、戦後を生き延びた徳正の(五十年余の間に胸の奥に溜まつた)秘密であつた。にもかかわらず、いずれの死者達も、徳正に対して「寛容」である。彼等は、一貫して「無関心」・「無視」を装うものの、ただ従容として「水滴」を啜り続けるだけである。また、石嶺にしても非難の素振りには微塵も見せず、へ徳正の足をいたわるように掌で足首を包み、へ一心に水を飲んでゐるだけである。

土気色だつた石嶺の顔に赤みが差し、唇にも艶が戻っている。怯えや自己嫌悪のなかでも茎は立ち、傷口をくじる舌の感触に徳正は小さな声を漏らして精を放つた。／唇が離れた。人差し指で軽く口を拭い、立ち上がった石嶺は、十七歳のままだつた。正面から見つめる睫の長い目にも、肉の薄い頬にも、朱色の唇にも微笑みが浮かんでいる。ふいに怒りが湧いた。／「この五十年の哀れ、お前に分かるか」／石嶺は笑みを浮かべて徳正を見つめるだけだつた。起き上がろうともがく徳正に、石嶺は小さくうなづいた。／「ありがとう。」

やっと渴きがとれたよ」／きれいな標準語でそう言う
と、石嶺は笑みを抑えて敬礼し、深々と頭を下げた。

徳正については後述するが、石嶺の〈笑み〉や感謝の言葉には、徳正を難詰するニュアンスは読み取れない。このテキストが喚起する不思議な抒情性や救済のイメージが、こうした死者の鎮魂・「癒し」に由来することは、おそらく誰もが認めるところであろう。

しかし、死者とは、かくも優しく「寛容」でありうるものだろうか。また、セツを含む〈手榴弾で自決を遂げ〉た〈同僚の女子学生〉や、テキストからは排除されている無数の日本兵以外の亡霊者は、「癒し」の〈水滴〉にありつくことはできないのであろうか。このように考えると、このテキストが潜在的に隠しもっている認識論的布置のフレームが透視できるであろう。つまり、この「癒し」の物語は、徳正の罪責感が紡ぎだした徳正による徳正のための個人的かつ独善的な自己救済の物語だったのでないか。そして、このことは、テキストから注意深く排除されているが、徳正の「戦争」観と深く結びついていると言つてよいだろう。徳正と石嶺とは、〈村から二人だけ首里の師範学校〉に進んだ当時の知的エリートであり、〈鉄血勤皇隊員〉として参戦したことを先に確認しておいたが、徳正の自意識の中には、自らの立たされていた政治力学的なポジションに対する冷徹な認識を見いだすことはできない。彼等を含めて

沖繩戦に狩り出された者達は、確かに戦争の犠牲者であったことは間違いない。いやもつと正確に、〈沖繩〉を抑圧・支配した近代日本国家の犠牲者であったと言うべきであろう。しかし、沖繩戦に狩り出された全ての沖繩民衆が「被害者」であったならば話は簡単だが、〈沖繩〉内部にも戦争を巡る政治力学は厳然として浸透していたし、そのシステム内部では、戦争を「聖戦」として積極的に肯定する言説もまかり通っていたのである。ある者は、そのシステムの力学にいやおうなく巻き込まれていっただろうし、ある者は、進んで身を委ねていっただろうが、〈師範学校〉出身の〈鉄血勤皇隊員〉である徳正や石嶺の政治力学的なポジションは、間違いなく後者に位置していたはずである。むしろ自覚的であったかどうかは、ここでは問題ではなく、位置のエネルギーとでも呼ぶべき力学が、彼等をそこに押し出していったことが問題なのである。徳正（あるいは書き手である目取真）には、そのことの認識が欠落していたのではないか。

つまり、ここで問題なのは、このテキストにおいて、戦死した兵士の「癒し」があまりにも安直に語られてはいはいまいかということである。極論すれば、ここでの「癒し」は、ホモソーシャルな軍隊内部の男性原理的なエロスの癒合による「癒し」なのである。目取真が〈沖繩を癒しの場として捉えるような発想〉を峻拒するとすれば、こうした

ホモソーシャルなエロスの癒合による「癒し」のイメージに對しても、もつと抑制的であるべきではなかったかというのが論者の独断に満ちた私見なのである。このことに關しては、さらに後述したいと思う。

二二

次に、(2)の徳正にとつての「癒し」について検証してみよう。徳正の隠蔽された過去と罪責については既に触れた。彼は、それをへ記憶の底に封じ込めて生きてきたはずだった^レが、その抑圧された記憶は、へ冬瓜^レのように膨れだした右脚によつて顕在化させられる。この現象については、岡本恵徳が妥当な解説を提出している。⁹⁾

主人公の徳正(とくしょう)は、渴いて水を求める友人や傷ついた兵士たちを壕の中におきざりにしたという負い目を担っている。しかし日常的にはその負い目は表面化しない。求められて戦争体験を学童の前で語ることはあるのだが、勿論その肝心な記憶は抑圧されて言葉にならない。しかしその抑圧された記憶は「冬瓜(すぶい)」のように脹れ、瓜先から水滴がしたたるようになるというかたちで現われる。(中略)潜在的な意識がその身体に影響を与え、それが身体に変容を与えることは、よく知られていることである。

この作品では、そういう身体と精神とのかわりをふまえて、無意識の負い目が、抑圧された分だけ身体の奇型として現れる様子を描く。が、その潜在意識が自己の具体にかかわるといふよりも、他者との關係に生じる倫理的な性格のものであるために、現実的な場面とはなり難い。そこで、ここでは水脹れのする脚、したりおちる水滴をすすりに来る兵士たちという、非現実で民話風な状況設定を必要としたのである。そして、そういう手法をとることで、始めて無意識の領域で当人を規定している戦争の記憶を生々しく描くことができたのであつた。

他者との關係において生じた根源的な精神的外傷(トラウマ)——今日の文脈で言えば、PTSD (Posttraumatic Stress Disorder) が内攻し、身体の奇型として発現するという捉え方には説得力がある。ことに「戦争」という極限状態でのそれは、いかに言葉で表象し再現しようとも虚構(虚偽)性を帯びざるをえないだろう。事実、テキストには、戦後を生き延びた徳正の虚構(虚偽)の語り行為が暴露されている。執拗なへ善意^レの依頼に根負けして、へ六月二十三日の「沖繩戦戦没者慰霊の日」の前になると、徳正は近隣の小・中学校や高校で、戦争体験を講演するようになった^レ。へ初めは無我夢中で話をしていた徳正も、しだいに相手がどういふところを聞きたがつていのか分

かるようになり、あまりうまく話しすぎないようにするのが大切なのも気づいた。調子に乗って話している一方で、子供達の真剣な眼差しに後ろめたさを覚えたり、怖気づいたりすることも多かった。へしかし、拍手を受け、花束をもらい、子供たちからやさしい言葉をかけられると正直に嬉しかった。子供や孫がいたらこんな気持ちになるのかと、涙が流れることさえあった。それに、家に帰って謝礼金を確かめるのも楽しみだった。大半は酒や博打に消えたが、新しい三味線や高価な釣り竿を手に入れることもできた。とあるように、語り部としての徳正は、自らのリアルな過去と罪責を隠蔽し、口当たりのいい物語として「戦争」体験を流通・消費させてしまう。その行為は、妻のウシが正しく指摘するように、へ錢儲けへ以外の何物でもなかったが、一方では、徳正に軽微なカタルシスをもたらずのももあったのである。ここには、書き手である目取真俊の厳しい眼光が光っていると云っていいだろう。つまり、慣習化され制度化された「戦争」の表象行為が、いかに偽善に満ちたものであるか、また、それがいかに感涙を共有したいと願う語り手と聴き手の共犯関係によって成立するものであるかを書き手はあばいてみせているのである。平和への希求として語られる物語（美談）であつても、それは、リアルな過去を抑圧・隠蔽するイデオロギーとして機能することを、このテキストは露呈させてしまっている。

ところで、死者達にとつての「癒し」は、徳正にとつての「癒し」となりえたのだろうか。このことに対して、テキストはいくぶん慎重である。目取真自身もへ……徳正は実際には癒されていないかもしれない。彼自身は、傷をようやく認めただけで、自分が見捨てた戦友の遺骨収集に本当に行くかどうかはわからない、弱い人間だと思えます。そういう弱さを抱えたまま生きて行くのが、大多数の人間だと僕は思っています。へ（前出「新芥川賞作家特別対談「絶望」から始める。」と語っていたが、渴きの癒えた死者達が姿を消し、右脚の腫れもひいた後の徳正は次のように描かれていた。

十日が経った。徳正は窓から裏庭の夏草を眺めていた。水が止まってから、兵隊たちは二度と現れなかった。それでも一人で寝るのが不安で、三日はウシにベッドの横の床で寝てもらった。（中略）明りを点けつ放しにしたまま、自分が寝たきりになっていた間の村の出来事を聞きながら、水を飲みに来た兵隊や石嶺のことを話そうかと迷った。しかし、結局話せなかった。これからも話すことはないだろうと思った。ただ、体調が回復したら、ウシと一緒にあの壕を訪ねてみたいと思つた。戦争中、ここに隠れていたのだ、とだけ言い、花を捧げ、遺骨を探すつもりだった。そう決意する一方で、自分はまたぐずぐずと時間を引き伸ばし、

記憶を曖昧にして、石嶺のことを忘れようとするのではないかと不安になった。あれほど飲まないと言った酒も再び飲み始めていた。

ここには、一連の出来事が徳正の日常性を根底から揺さぶるものではなかったことが明示されている。確かに、徳正は「弱い人間」として表象されているのである。しかし、ある種の「癒し」がなかった訳ではあるまい。それは、先に引用した、「怯えや自己嫌悪のなかでも茎は立ち、傷口をくじる舌の感触に徳正は小さな声を漏らして精を放った。」にも伺えるように、右脚の親指（ペニスのメタファ）を啜る死者達の行為が、徳正にエロスのな愉樂をもたらしたことから理解されよう。つまり、徳正にとって、死者達との交感（交歓）とは、隠蔽された過去や罪責の自認を促すものであったと同時に、エロスの癒合を通しての贖罪行為としてもあったのである。しかし、こうしたエロスを仲立ちとした死者とのホモソーシャルな交感（交歓）は、ロマン主義的であると言つていいだろう。石嶺に向かって、「怒り」を込め、「この五十年の哀れ、お前に分かるか」と悪態をつき「号泣」するしかなかった徳正にとって、戦後五十年とはある意味で、本人にさえ自覚されない虚偽の日々であったはずである。「十七歳のまま」である石嶺と自堕落な日々のなかで老いていく徳正との対比は、残酷でもある。しかし、徳正は、死者との交感（交歓）のなかで、

一瞬ではあるが、へ老いた自分の体が立てる青い草の匂いを嗅いだのである。このことは、(4)に挙げた自然の草木の旺盛な生命力のイメージと通底して、このテクストに内在する再生・「癒し」の徴表として確認することができる。

もし、このテクストが、以上に見た(1)・(2)・(4)の「癒し」のイメージで覆い尽くされていたとしたら、論者としては、大方の評価に反し、さほど高い評価は与えることはできなかっただろう。むしろ、私見によれば、これらの「癒し」は、このテクスト自体において、自ずから相対化されていると思われるのである。そこで重要になってくるのが、(3)戦争の傷とは無縁な人々にとつての「癒し」、そして、(5)例外として全く作用を及ぼさなかった徳正の妻・ウシの存在ということになるのである。

四

(3)については、そもそも、それを「癒し」と呼べるかどうかさえ疑問を感じずにはいられない。なぜなら、彼等にとつては、徳正の右脚親指からしたたる「水滴」は、回春剤や養毛剤として作用するからである。徳正の従兄弟・清裕（せいゆう）は、徳正が分泌する「水滴」の不思議な「効能」にいち早く気づき、それを「奇跡の水」と称して

売りに出し、莫大な利益をあげる。彼の夢は、儲けた金と「奇跡の水」を携えて、〈博多から東京までソープ巡りをすること〉だった。

水の効能は清裕の予想以上だった。五十年來の禿という老人の染みだらけの頭にさえ、五分もしないうちに産毛が生えてきた。最初はバカにした顔で笑っていた若禿の高校教師も、試して三分後には有金はたいて水を買っていった。顔に塗れば皮がぼろぼろ剥けてみずみずしい肌が現れ、飲めば長いことしなだれたままだった一物が、下腹につかんばんかりに頭をもたげてくる。最初はいかさまだろうと眺めていた客達も、今年八十八歳という老人が自分の股間を撫でながら象のような目で笑みを漏らした時には、おお、という声を上げ、水を求めて殺到した。一合ビン一本一万円という値段は吹っかけすぎかと思つたが、一時間もしないうちに売り切れた。

引用に見られるように、徳正の「水滴」は、生者には複雑な欲望を満足させる即効性のドラッグとして機能している。しかし、その「効能」も、徳正の脚元から戦死者が消えた途端に霧消し、毒性の「腐れ水」に変化する。丸谷才一などは、このスラプスティック・コメディめいたシークエンスを不要のものとして批判しているが、私見によれば、二つの点において、これらは重要な機能を果たしている。

一つには、テキストに支配的な「水滴」による「癒し」のイメージを反転させる点において、二つには、「沖繩」を美化する文学・美学イデオロギーを脱構築させる点においてである。つまり、「水滴」による「癒し」とは、両義的なものであったのだ。それは、死者の根源的な「渴き」を癒すものであると同時に、生者には狼狽な欲望を助長し、果てはグロテスクな衰滅を招くポイズンでもあったのである。むしろ、これは勸善懲惡的な教訓などではない。そもそも、現代における神秘的な「癒し」など、見方を変えれば、たかだか現世御利益的な欲望の産物に過ぎないのだとする強烈なメッセージが混入されているのである。それだけなく、徳正と清裕の関係も、実は盾の両面に過ぎず（両者が「同じ歳で、従兄弟同士」に設定されていることに留意）、徳正の贖罪は、清裕の商売と背中合わせであることも暗示されているのである。こうした「癒し」の両義性は、文学・美学イデオロギー的「沖繩」観をディコンストラクトさせずにはいけないだろう。「奇跡の水」を求めて殺到する「沖繩」民衆のスラプスティックふりを見よ。どこに、ヘバランスのとれた社会（池澤夏樹）や「未来に向けて我々が努力していくべき、目標の幻想」（日野啓三）があると言うのか。これは、現代日本の戯画以外の何物でもない。ここにこそ、「沖繩だから癒しに近いということはない」という目取真俊の発言の真意があつたことを、我々は知るべ

きである。

(5) については、簡潔に触れるにとどめよう。徳正の妻・ウシは、一度だけ、徳正の「水滴」を口に含んだことがある。〈親指の皮の破れ目から盛り上がっては滴り落ちる水の玉を見ていたウシは、ふと好奇心に駆られて、そつと指先を濡らして舐めてみた。糸瓜の水のような青くさく淡い甘味があった。〉——。このことは、ほとんどの評者が見落としていることだが、清裕の場合、わずかに触れただけで「効果が表れるのに五分もかからなかった」のに対し、ウシの場合は、変化らしきものは全く表れていないのである。また、回春剤や養毛剤として殺到した人達ともウシは好対照をなしている。深読みを承知で言えば、「癒し」の水、あるいは「奇跡の水」は、ウシにとっては、得体の知れないただの迷惑な水に過ぎなかったのではないだろうか。つまり、ウシだけは、「水滴」をロマン主義的に解釈する「意味の病」から免れているのである。それは、徳正の異変に対して、「はあ、この怠け者が、この忙しい時期に異風な病氣なりくさって」と毒づく所や、大学病院への入院を勧める医師に「糞の役にも立たんさや」と呟いたり、「評判の高いユタ」に対しても、「高い金をふんだくられた上に、祖先への敬いが足りないと言われ、ユタにすがった自分の心の弱りようが情けなくなつた」りする箇所にも如実にあらわれている。言うなれば、ウシは、徹底し

た生活者でありリアリストなのである。それでいて、徳正の看病と農作業に余念のないウシ、調子に乗って語り部を続ける徳正に、「嘘物言いして戦場の哀れ事語てい銭儲けしよつて、今に罰被るよ」と釘を刺すウシ、徳正が治ればめつたに見せぬ涙をこぼすウシの存在は、このテクストの開口部として、他の作中人物の言葉や身振りを相対化し、宙吊りにする機能を果たしているのである。

このように見てくれば、「水滴」が、単に一義的な「癒し」をテーマとしたテクストではなかったことが了解されるであろう。確かに、徳正の右脚親指からしたたりおちる「水滴」は、死者達の根源的な「渇き」を癒し、徳正の過去と罪責を洗い浄めてくれたかに見えるが、それは、あくまでもテクストの表の貌に過ぎず、その垂直線は、現代日本の戯画とも言うべき猥雑なエロ・グロ・ナンセンスのストラステイック・コメディと、ロマン主義的な「意味の病」とは無縁なりアリストの眼差しとの挾撃によって、絶えず脱臼させられていたのである。従つて、テクストの表の貌のみを焦点化し、それを「沖繩」の独自性に結びつける読みは、無効となる。そうした読みは、単に文学・美学イデオロギーと言うべきである。しかし、そうした文学・美学イデオロギーを誘発した一因は、この「水滴」というテクスト自体が負うべきだとも考えられる。〈戦争の体験とは、時間とともに地下の水脈に浸透していつて、鍾乳洞のよう

に、五十年たつてからにじみ出し、したたり落ちてくる水滴なのかもしれない。彼の心の中に何か空洞があつて、ここにぼたりぼたりと滴り落ちてくる体験は、あくまでもその人固有のものだと思ふんです。経験を歴史的な一般論に解消するのではなく、自分でも知らないうちに蓄えこんでいたものが、ある日現実となつて目の前に現れてくる。そういう瞬間があるんじゃないか。」と目取真俊は語つていた（前出「新芥川賞作家特別対談 「絶望」から始める。」）。なるほど、「戦争」、あるいは喪われた記憶を表象することは、特に戦後生まれの現代作家にとつては困難な作業であるろう。〈歴史的な一般論に解消する〉のではなく、〈その人固有〉の〈経験〉を内奥から表現することの重要性を否定するつもりは毛頭ない。しかし、沖繩戦ひとつとっても、リアルな「出来事」とは錯綜している。〈歴史的な一般論〉ではなく、また、独我論に閉塞するのでもなく、「歴史」そのものを探究する姿勢を通して、安易な文学・美学イデオロギー的〈沖繩〉観を払拭するテクストの強度を、目取真俊が獲得することを切望してやまない。

注

(1) 目取真俊／池澤夏樹「新芥川賞作家特別対談 「絶望」から始める。」（『文学界』、一九九七・九）

(2) 末尾に、〈このシンポジウムは、九十六年十二月十五日

から開催された沖繩文学フォーラムのパネル・ディスカッションとワークショップを基に構成したものです。〉とある。正式には、一九九六年二月一日、一六日に那覇市内のホテルで開催された、沖繩文学フォーラム実行委員会主催の「沖繩文学フォーラム」を指し、『沖繩文学フォーラム報告書』（一九九七・三、沖繩文学フォーラム実行委員会）も公にされている（未見）。なお、このフォーラムの実態については、花田俊典「ヘオキナワン私記」（『敍説』Ⅳ、一九九七・八、花書院）に詳しい。現代のポストコロニアリズム状況下における困難なアイデンティティ・ポリティクスの問題に関しては、拙稿「都市テクスト論としての〈沖繩〉——霜多正次『沖繩島』を視座として」（『敍説』Ⅳ、一九九七・八、花書院）で詳しく述べた。

(4) (2) に挙げたシンポジウムの中で、離島の由布島出身である小浜清志から重要な問題提起があつた——〈僕は、大城さんの小説や、又吉さんの「ギンネム屋敷」を読んだ、あつ、自分はウチナーのなかでもウチナーではないんだ、と思ひました。沖繩の虐げられた歴史と言いますけれど、かつて沖繩の琉球王朝も、我々離島の者から搾取して、のうのうと繁栄していたわけですよ。これにはやはり反発しなくてはいけない、と思つたのが本音です。（後略）——にも関わらず、池澤夏樹は、〈それはオリエンタリズムの問題ですよ。〉と引き取り、以下、オリエンタリズムの概念を希釈した形で解説しつつ、〈オリエンタリズムの有害性は文化論的には考えるべきですが、

文学的姿勢としては、そんなもの論外だと言うしかない。と切り捨てている。ここにも、オリエンタリズムの難局をいともたやすく擦り抜けてしまう文学・美学イデオロギーが典型的に露呈していると言えよう。

(5) 目取真俊／新城和博「対論 語るなかれ「沖繩の心」を」
〔朝日新聞〕大阪本社版、一九九七・六・九

(6) 池澤夏樹は、まず、「文芸時評」〔朝日新聞〕大阪本社版、一九九七・三・二七)において、今回の九州芸術祭文学賞を受賞した目取真俊の『水滴』(『文学界』四月号)はすぐれた短編である。テーマと、手法、趣向、それに文体がうまく一致して、いい効果を上げている。〈阪神大震災の後で何度か言われたように、戦争や自然災害で多くの人が死んだ後、生き延びた者は自分が生きていることを喜ぶと同時に、死者たちに対して負い目を感じる。この短編は徳正の負い目とその解消の物語である。戦争体験を抽象的な平和論の部品としてではなく、個人の記憶の上に立った小説のテーマとして用いて成功している。非現実的なできごとを中心に据えた民話風の展開は、細部のリアリズムでしっかりと支えられ、短い話の密度を十分に高めている。〉と絶賛し、さらに注(2)で触れた「沖繩文学フォーラム」にも言及し、
「そこで論議された問題のいくつかについて、『水滴』がすぐれた解を出していることは指摘しておこう。戦争の記憶というテーマ、それを語る器としての民話的手法、方言の使いかた、等々の点で、これは優等生の答案と言っている(後略)。」として、自らの問題系に強引に引き付

けて称賛している。また、芥川賞選評でも同様に、(『水滴』は民話(寓話ではない)の形を借りて五十年前の戦争の後遺症を巧みに描く。非業の死者の前では生き延びたこと自体が罪の意識を分泌する。戦場の体験を語ることはいかに誠意を以てしても嘘になる。その切なさ、その哀れをこの作品は見事に描いている。他の候補作がみなどこかで文学を(人生を?)なめているのに対して、この作品だけは誠実にテーマに向き合い、しかも充分な技術があるおかげで自己満足に陥っていない。受賞に値すると判断した所以である。)(『文藝春秋』特別号、一九九七・九)と推薦の弁を述べている。池澤の後押しが、芥川賞受賞に一役買っていることは間違いないだろう。しかし、(『文学を(人生を?)なめている)／(誠実)云々の言説には、池澤の安易な「文学」至上主義が透けてみえる。この「文学」を聖域とするロマン主義が、池澤の文学・美学イデオロギー(『沖繩』観に通底していることも忘れてはならないだろう。

(7) 巖谷國士『シュルレアリスムとは何か』(一九九六・六、メタログ)に詳しい。

(8) 吉田司『ひめゆり忠臣蔵』(一九九三・一〇、太田出版)は、半ばやけくそ気味に、ひめゆり神話を破壊しようとするルポルターージュであるが、その中で吉田は、(『鉄血勤皇隊』についても、次のような爆弾発言をしている。
「中学卒業予定の十八歳になる少年兵が『あなたがたはここを出よ』と小銃で脅して防衛隊や民間人を壕から追い出していた。『自分たちが生命をかけているんだ。

あなたがたは要らん』といった」〔防衛隊〕 福地曠昭
／＼ひめゆり隊（＝女子師範を頂点とした知的エリート）
が、「大和撫子」の日本人として死んだように、ここでは
鉄血勤皇隊の少年兵（＝男子師範を頂点にした知的エ
リート）が、あの、鉄の暴風^レ 吹き荒れる壕の外に沖繩
人同胞を無慈悲に追い出す加害者・日本兵そっくりの姿
となつて現れてくる。そう、「自分たちが生命をかけて
いるんだ」という彼らの肉体は死滅したが、彼らのこの
誇り高い「日本同化主義」の精神、即ち沖繩の民衆を低
く見てこれを本土並みに文明開化することを最大の使命
と考える指導者意識や前衛気取りの伝統だけはたつたひ
とつ死滅せず、戦後沖繩の政治や教育、経済の支配原
理の中にしつかりと、無批判に受け継がれてゆくので
ある。——。こうした立場に立つ吉田にとつては、沖
繩戦もまた別の相貌をもつて立ち上がってくる。少し長
くなるが、目取真俊の「水滴」の孕む認識論の布置と対
比するためにも、引用しておく価値がある。へ沖繩戦と
はどく考えても、今日ひめゆりや鉄血勤皇隊の生き残り
の人々が主張するような、一方的な戦争被害の物語では
ない。それは理不尽に殲滅された悲惨な被害者の物語で
はなく、アジアの近代を通じて凱歌をあげ続けた加害者
たちの正当な末路の物語にすぎない。沖繩人がもし「県
民の三人に一人が沖繩戦で死んだ」ことを主張するなら、
高砂族の死者は二人に一人、「蜂起前、一千二百三十七
名いた六部落の人口は半分になった」のだし、沖繩戦で
日本軍は、「約十一万人の陸戦力を本島中南部を中心に

投入、うち少なくとも九万四千人が戦死した。将兵の死
亡率は八五％に達する」〔ある沖繩戦「儀同保」のだ。〕

——。文中、ことさら「高砂族」が取り上げられるのは、
「台湾植民地化の先兵や番犬」になつたのが他ならぬ
「沖繩知識人」だつたからである。

(9) 岡本恵徳「沖繩の小説の現在」〔敍説Ⅳ、一九九七・
八、花書院〕

(10) 丸谷才一は、芥川賞選評〔文藝春秋、一九九七・九〕
において、次のように述べている。へしかし足から出る
水が毛生え薬になつて、それで儲ける段になると、想像
力の動き具合が急に衰へる。ごくありきたりの展開にな
つて、気持がしらける。徳正の自己苛責の件だけでは持
たないから、脇に滑稽譚を添へるのは当然の処置と思ふ
が、しかし大事なものはそれが綺譚として主筋と張合へる
だけの詩情をたたへてあなければならぬといふことであ
る。——。また、田久保英夫も同様に、へその水には
育毛や強精の特効が現れ、従兄弟がそれを世間に売り出
して、大儲けする段取りになると、寓話性が強まる。ま
して最後に水が効力を失い、従兄弟が群衆に制裁をうけ
るに至つては、寓話性がきわめて濃厚になり、つくりが
目だつ。と述べているが、私見によれば、こうした読
みは、「水滴」の最も肝心な部分を誤読したものとなる。
「水滴」は、丸谷の言う「詩情」から最も遠い所で発想
されたと考えるのである。

(11) あえて整合性を持たせるならば、「水滴」が不思議な
「効能」を發揮し始めたのは、へベッドの傍に兵隊達が

立つゝようになつてからだを判断するしかない。ウシが口にしたのはそれ以前、清裕が〈効能〉が表れたのはそれ以後のことであるから、いちおうの辻褄は合う。